



祝 辞

東京都知事 安井誠一郎

先頃、私は太平洋市長会議に招かれて渡米し、主要都市の地方自治の実際を大急ぎで視察して参つたのでありますが、その視察中、私の最も強く関心を抱いたことは、どこの市民でも——中小都市の市民は殊更であります——市政については、本当に自分自身の身近な問題として生活の中に受け入れているという点であります。

そこには、地方自治を借物とか、不相応のものを与えられて戸迷つているとかいうような風は全く見られず、丁度、洋服が「ピツタリと身に合つている」といつた感じで、私としては何とかしてこうした空気を都区政の上に反映したいものだと思つて感ぜられた次第であります。

これに反して、わが国においては、民主的な地方自治制度が欧米のそれに比して、その生涯の日が極めて浅いためもありましようが、いわゆる制度のみが先に走つてしまつて、住民は否も応もなしにダブダブな服を着せられ、そして唯わけもなく街の中に放り出されているといつた格好で、少しも自分自身のもののような気がしないのでいるのが実情のように思われます。

然もこうした事柄は、都と区の制度についてもあてはまるのではないでしようか。

戦前の制度はさておき、終戦後において迎つて来た幾多の民主的な都区制度の歩みを見ると、確かに都区の復興と発展に多大の貢献もし、又制度的にも進歩の跡は認められるのでありますが、同時に前に述べたように、誠に残念ではあります。未だ必ずしも住民にピツタリと合致した制度になりきつていないのではないかと思われるのであります。

私は、いろいろの段階を経て現在の都の姿や特別区の制度を築き上げてきた先輩各位の不断の努力には衷心より尊敬と感謝の意を表するものではあります。一面又、地方自治全般の苦惱の問題として取



賜上げられている。彼上の事実をも深く反省するとき、住民生活の実態に即した眞の都区政の完成には、今後ともこれに劣らない程の長い年月と、多くの人々の不断の努力と研議がなされなければならないと思ふのであります。

このときに当り、これら都区政関係者の有力な指導書として、特別区協議会から「区政春秋」という雑誌が発行されることですが、地方制度改革について世上論議の高まりつつある今日、誠に時宜を得たものと深く御同慶に耐えませぬ。

よりよい都区政の完成を目指して邁進することは、極めて困難な、茨の道であるに違いありません。然し、困難な仕事であればある程これらの研究や論議が充分に盡され又、批判されることが大局的な觀察を助け独善に陥る弊を救うために重要なことと思われまふ。

どうか、この「区政春秋」が都区政における諸問題の研究と指導の書として、多くの関係者に愛読され、又明るい都区政への運営の指標ともなるよう心から希望して、一言お祝いの言葉といたします。

祝 辞

東京都議会議長 佐々木 恒 司

新憲法の精神にのつとり地方自治法が施行されて以来、新しい地方自治の大綱は漸く確立し、特別区の自治権もまたここに一段と充実されたのである。

爾来、東京都二十三区は打つて一丸となり特別区協議会を設置し、区民の福祉増進、ひいては東京都発展のために貢献されたことに対しては、心から敬意を払うものである。

この膨大にして、複雑多岐な区政を如何にして区の相互が相提携し、連絡、調整をはかり円満なる自治行政の運営を計るかについて、私は秘かに心を痛めておりましたが、今回幸いにも機關誌として「区